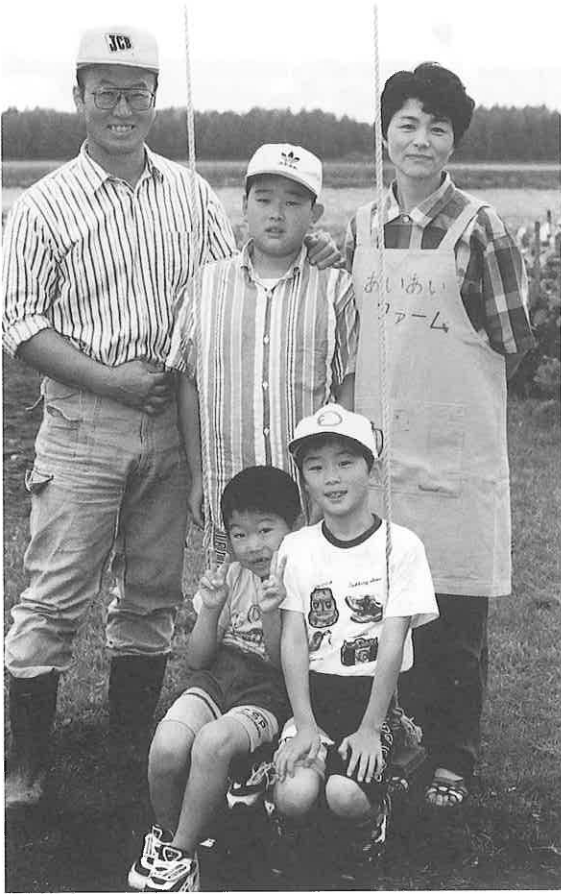


夫婦で共有した農家で あることこの夢と理想

外山勝則・聖子夫妻

〒0802106 北海道帯広市美栄町西6線128
☎0155(60)2110

「プロフィール」外山夫妻は、帯広で36haの畑作農業を経営。ともに、国内外での「他所の畑を食う」体験を通して、自分を見詰め、他者を理解する生き方を身につけた。両親と4人の男の子の家族として、また農業経営者として、あるいは一市民として様々なボランティア活動や自らを高める様々な活動に参加する。整然とした畑、子供たちの笑顔や花一杯の庭、訪ねてくる人々に、外山農場の家族と経営が見える。



外山勝則さんと外山聖子さんを、あえて、夫婦であり同僚（パートナー）であると紹介したい。共通する夢と理想を持ち、家族と外山農場の経営を受け継ぎ未来へ広げる二人の主宰者なのである。

外山農場は、36haの畑に麦、加工・生食用を含めてのバレイショ、ビート、大豆・小豆・インゲンの豆類、スイートコーンなどの一般畑作の他、カボチャ、アスパラなどの野菜を栽培している。帯広の畑作農家としては比較的規模の大きな農家であろう。

家族は、経営者の外山勝則さん（41歳）と聖子さん（39歳）の間に中学生を頭に4人の男の子。そして勝則さんのご両親。忙しい時期にはご両親も作業を手伝うが、経営は勝則さん夫妻にバトンタッチされている。労働力はパートの労働力を求めることもあるが、基本的には家族労働力でこなせる経営を目指している。

勝則さんは、農業経営者としての地域活動の他にも北海道のトップ経営者の自主的経営研究会である「北海道土を考える会」の前会長であり、帯広市のJICの活動等を通じた異業種交流活動や、夫人の聖子さんとともに消費地の子供たちを自宅にファームステイさせるといった、農家であることの社会的役割を果すことにも熱心な人である。

一方、聖子さんは、宮城県の農家に生まれ、子供時代から農業をするのだと決めていたという。北海道の酪農に憧れ、北海道で酪農実習もした。実習先の経営主が酪農学園の卒業生だったこともあり、酪農学園大学の短大に進学。卒業後は、道庁に就職し生活改良普及員となった。そして、勝則さんと出会う。

二人の結婚は昭和39年、ご主人が27歳の時だ。お見合いだった。

「彼女は僕の歩く道に光を照らしてくれる人です」

外山勝則さんは横に座る聖子さんの方を見ながらそう言った。それは、加工原料としての農産物生産が主体の現在の経営に加えて、聖子さんが中心になって取り組んでいる、お客さんの顔が見え、食べる人との交流の中で作る農業経営を目指す、外山農場のもう一つの新しい道のことであるとともに、



帯広市内の消費者を招き入れるだけでなく、首都圏からの子供をファームステイさせたり、農水省からの研修生も受け入れている。今日は、消費者の仲間とともに続けている農業理解のための「あいあいファーム」の農作業実習の日

夫婦の目指す人生の道でもあるようだった。

アメリカ大リーグのスラッガー、マグワイア選手を思わせる逞しい体格の勝則さんが、そんな台詞をスラリと言つてのけることに、農家というより日本人の夫婦観や家族観の変化を感じた。でも、それは聞いている者にとつても、何かすがすがしさのようなものを感じさせる一言だった。

今回は、そんな外山夫妻（勝則さんと聖子さん）のことを紹介したい。

他所の飯を食べてきた二人

生活改良普及員時代の聖子さんは、農産加工品の共同作業所を農家の主婦たちと一緒に作り上げていくことなどが主な仕事だった。自分が働きかけることで人々が変わっていくことを面白いとも感じた。しかし、それ以上に年かさの農家の主婦たちから学ぶことの方が多かった。

そんな聖子さんが、「農家を指導する」という立場に立った生活改良普及員の仕事をしながら感じてきたことがあった。そ

れは、農業には沢山の選択肢があり、いろいろな人生や様々な経営があつてもよいのだということ。そして、農家自身が主体的に自分や経営を創り上げて行くこと、言つてしまえば、自分がやつてきた生活改良普及員の指導など必要としない、自立した農家が育つことだった。

聖子さんは、勝則氏を伴侶として選んだ動機をこう話す。

「私は、農家の主婦として誇りを持つて生きていた母親を見て育ちました。そんな母を今も尊敬しています。大人になつたら農家になろうと思つていたし、結婚するなら農業をやつて人だと決めていました。それで彼とお見合いしたのです。私も酪農家での実習体験をして、そこでいわゆる他所の飯を食べる体験を通して自分を見つめることができました。彼は、言葉も通じないアメリカまで行つて他所の飯を食べてきてる。私以上によその世界を体験しているんです。そんな人なら、目標を持つて人生を投げずに生きていく人なのではないかと思ひました」

聖子さんは、勝則さんとの結婚を機にやり甲斐を感じてきた生活改良普及員の仕事を辞めた。未練はなかった。

「農家との結婚は女性の職業選択を奪つてしまう」という議論が農業界にある。聖子さんの場合それは何の問題

にもならなかった。農家として夫と共に生きて行くことを夢見てきた聖子さんなのであり、それが嫌であつたのなら、そもそも勝則さんとのお見合いはあり得ないことだった。人生の夢や目的を共有できる伴侶に出会えたことは幸運だった。でも、それは成り行きではない。どんな結果になろうと、それは聖子さん自身の責任で選んだ人生の選択なのだ。

自分を語り相手を認める

一方、勝則さんは、高校進学頃までは、農業について特に好きも嫌いも無く、子供の頃から何となく父のあとを継ぐのだろうと考えていた。しかし、農業高校を卒業する頃になると、農業を継ぐことには抵抗はなくても、農業への理解が深まった分、もつと農業を学びたいと考えるようになっていた。当時は、馬と人力労働から機械の時代へと移行していく時代だった。苦勞しながら体で憶える農業の時代から合理的な知識が経営を創り上げていくという農業の変化を、勝則さんはもつと勉強したいと思うようになったのだ。

収穫の喜びを感じる農業者の精神を勝則さんは子供時代から持つていた。でも、もつと別な何かがあるのでないかと予感した。それに、高校を出てそ

のまま農家になってしまうことで、古い農業や農村の在り方に無批判に染められていってしまうのではないかと、う思いもあった。

親は進学を許してくれた。

入学した拓殖大学農業短大は、学びの場であると同時に、府県出身の自分とは異なる経験を持った同世代の友人たちと出会う場でもあった。それは異質の者と調和しながら自分の位置を確認していく初めての体験だった。

短大に入学したばかりの頃、青森から入学した友人が

「自分はアメリカに農業研修に行く。アメリカの荒くれ者と喧嘩することもあられるかもしれない。だから空手部に入る」と勝則さんに話した。

彼は、アメリカ研修への夢を語り、そのための空手修業までを考えていると言ったのだ。人生の岐路に立ちながら、自分にはまだ見えていない曲がり角の先にあるもの、その先にある広い世界が彼には見えているようだった。どちらかと言えばひ弱にすら見えた友人は、卒業する頃には心身共に空手部のリーダーとして皆を引張っていた。今、網走で農業をするその友人の影響もあった。

勝則さんはアメリカの大規模な農業経営を体験してみたいというより、理想とする機械化農業の合理性や経営の

在り方を学び、そして、そこに生きる農家の生き方を知りたいと思った。

「あと2年間だけ時間を欲しい」

両親は彼のわがままを聞いてくれた。

研修先は、カリフォルニア州の北、ワシントン州のヤキマという町だった。研修に入った農家は酪農家で野菜も作るという家族経営の農場だった。

両親と5人の子供たち、その連れ合いたちが農場にかかわっていた。誰が跡取りなんていうことではなく、家族皆で経営会議をしながら、皆がそれぞれにチャレンジし、皆がそれを助けるというような家庭だった。

奥さんはマネージメントのために会計士の資格まで取っていた。家族経営といっても、販売金額も大きく夏の間だけでも百数十人の労働者を雇い入れており、その管理だけでも合理的なマネージメント能力がなければ成り立つものではなかった。彼らは勝則さんを息子の様に可愛がってくれた。下手でも英語で一所懸命に自分の意見や自分自身について話

した。彼らは控え目であることより、自分の事を語る者を受け入れるのだった。言葉の上手下手ではなく、自分を語れない者は相手にされなかった。

お互いが責任を持って自分を主張するからこそ相手も見出すことができ、そして相手を否定することではない納得のいく合意も図れるのだということを知った。

同時に、アメリカ人の農家が自分の耕地の大きさや力を自慢するのではなく、家族の歴史、苦勞に耐え抜いてきた先祖を持つことを誇りとする人々であることを知った。ホームステイ先の家族も、何代も前の先祖が北歐から東

海岸に上陸し、そこからアメリカの西の端にあるワシントン州の地で農業を始めるまでの歩んできた道と、その苦勞に打ち勝ってきた先祖を持つこと、また自分がその誇りを受け継ぐ者であることを、外来の若者である勝則さんに誇らしく語った。

社会の中に自ら生まれ直す

勝則さんにとってアメリカで働き、そこで生活することは、自分自身の意見を持つことだった。そして、自分を語ることを通して、自分自身を見つめることだったのかもしれない。



36haの畑作経営を家族労働でこなすための機械装備は大変なものだ。外山さんは「欲しいものと必要なもの」を区別して導入するようにしている。

勝則さんの短大時代やアメリカでの生活は、彼が自ら村や家族を越えたより広い社会の中に「生まれ直す」ことを学ぶ場でもあった。

勝則さんは、22歳で帰国した後も、青年団活動、農協青年部、農協の活動だけでなく、地域を越えた集まりにも積極的に参加し、学びながら自らも発言していった。内に向かうのではなく地域や農業の外部に向かって働きかければこそ、自分自身や家族、地域、農業を考えた。それは常に、受け継いだものへの感謝と、未来に残すべき自らの責任を問うことでもあった。

村社会や家族のような同質の者たちだけで構成する社会や集団の中だけで



生きる「村の大人」になるのなら、帰属する集団にさざ波を立てずに調和することを知るだけですむ。でも、すでに農民が村内だけの論理で生きていく時代ではない。村の中だけで通用する論理に従うことしか知らぬ「村の大人」たちは、村や農業の外部にある社会や論理に出くわした時に動揺を隠せない。彼らは気位いばかり高くても、自分たちと別の論理を認めることや、自らの伝統や風土が削り上げてきた固有の論理を誇りを持って主張することもできず、不要な摩擦や混乱の中に陥ってしまう。男と女、夫と妻の関係も同じなのではないだろうか。

人は、彼の誕生を祝福してくれる家帯広の畑作農家である外山農場の生産は、加工原料が主体になるが、聖子さんを中心に、顔の見える農産物販売を広げようとしている。消費者に直接出荷するためのパレイシヨを貯蔵するために、倉庫の一部に自分で断熱剤を吹きつけた。北海道で冬に芋を凍らせないためにはこんな厚みが必要だ

族や村人の間に「産み付けられる」が、自立した個人として生きて行くためには、より広い世界の中に「自ら生まれ直す」必要があるのだ。

外山農場では、異業種の人や消費者を仲間にした様々なイベントを開いている。ファームステイの子供たちや農水省の人が研修のために宿泊するため、夫婦で納屋の改造をしたりもしている。でも、そのことが外山農場としての直接的な利益につながるわけではない。両親も笑って協力してくれていて、十分な納得を得られているわけではないようだ。ましてや地域の人々には「観光バスまで呼んで何している」と冷やかされたりもする。

これまでの結婚生活を振り返って、二人は口を揃えてこう言った。

「我々には違う部分も沢山あるけど、生きていく上で大切にしているものがよく似ている。そして、二人が共通の目的や目標を持っているということが、我われにとつて幸せで素敵なことだなど思っています」

外山夫妻の場合でも、夫婦の間だけでなく、家族あるいは地域社会との関係の中で、思いどおりに理想を

通してきたわけではあるまい。もちろん、お互いが我を張って生きてきたのでもない。

二人の間には家族や農業というものへの夢や理想を共有できるという幸運はあったにせよ、そこには、お互いがパートナーの考えの違いを認める努力があったのだろう。また、両親や地域社会に対しても、他者に求めるだけではない外山夫妻の「生き方の努力」があったのではないだろうか。

しかし、外山夫妻はどんな時でも正面から向かいあい、自らを語りながら、相手に求める以上に自問し続けてきたのだろう。共に地域や社会あるいは両親や子供たちに精一杯の働き掛けをしながら、その葛藤の中でこそ愛情と共感を高めてきたのではないか。歴史を受け継ぎながら、後に続く者に「良かったね」と言われる未来を残すために。誰の指導でも指図でもなく、彼ら自身の生き方の誇りと責任を持った選択として。

人生も家族も経営も、人によりその在りようは様々であろう。でも、これからの農村を中心となって作り出していくのは、自ら歴史を背負い未来に責任を持つとする、自立した個人としての男であり女、そして自負を持つ農業経営者たちなのではないだろうか。

(昆 吉則)

